

参加目的に着目した組織キャンプ参加者の声かけに関する比較研究

東 雅宏（白山市教育委員会）

【要旨】

本稿は、小中学生の組織キャンプにおいて、参加者の参加目的とキャンプ中の声かけとの関係を検討したものである。さらに、本研究では分析対象とした2ヶ年度のキャンプを比較し、グループのサイズと声かけの行動の関係を分析した。

参加者がキャンプに期待するものを「自然」「友だち」「自分」に分類したところ、「友だち」への期待が大きい参加者であっても「自分」に関しての期待の強弱で周囲への声かけ行動に違いがあると明らかとなった。仲間づくりを期待している参加者であっても、自分自身に関しての期待の強弱で行動に違いがあると考えられる。

また、班を構成する人数と声かけの関係を2ヶ年度のキャンプで比較したところ、構成人数が少ない方が声をかけ合う比率は低い傾向にあった。共に活動する人数が少ない方が、班としての行動につながらないことが考えられる。

1. 研究の背景と目的

野外教育の形態の1つである組織キャンプ（以下、「キャンプ」とする）では、仲間と共同生活を送ることや小グループによる活動を通して、参加者同士の相互作用が働き、目標達成や問題解決に向かう場面が数多くある。それらの場面に出会い、一人一人が自然や他の参加者、指導者と関わり対応していくことを要因として、達成動機の向上、自律心の向上、自己決定感の向上など多くの教育効果が表れてくることが明らかになってきている¹⁾。

短期間で参加者同士が協力しながら活動を進めるには、グループ運営をいち早く形成することが求められる。参加者同士の人間関係を築く上で、周囲に声をかけて仲間づくりを進めることができる参加者は重要な役割を担う。そのため、このような参加者を事前に把握し意図的に配置することが、より効果的にグループ運営を行うことにつながるだろう。

筆者は、参加者一人一人が持つ所期の思いがキャンプ中の他の参加者への声かけに表れていることに着目し、仲間づくりを期待する参加者からの継続的な声かけが、他の参加者にも声かけを誘発して仲間意識を全体に広げていることを明らかにした²⁾。一方、この「所期の思い」は、キャンプへの参加申込書とキャンプ後の自分自身に宛てた手紙の文面から把握したものであり、思いを持っても手紙等の文言に表れないことも考えられる。そのため、参加者の所期の思いをより正確に把握するために、野外教育の持つ様々な効果のどの側面に参加者が期待しているかについて事前に把握し、キャンプ中の声かけとの関係を検証することとした。

野外教育の研究では、その効果を3つの側面から言及するものが多い。Smisson は、野外教育の効果を「環境に対する行動と理解」「社会的人間関係の拡大」「自己成長」とし³⁾、多くの研究者が同様の見方をしている。小森は、Smisson を始め、既出の定義や理論から野外教育の目的となる基本項目が「自然」「他者（他存在）」「自己」であると指摘し、自身も野外教育の目的を「個人と地球・自然環境との関わり」「個人と周囲出来事（他存在）と

の関わり」「個人とその人自身（自分自身）との関わり」の3点にまとめ、「三大学習観点」として挙げている⁴⁾。本研究でもこのSmissenの3分類で参加者の所期の思いを捉え、キャンプの参加目的とキャンプ中の声かけ行動の関係を解明することを目的としている。さらに、本研究では分析対象とした2ヶ年度のキャンプを比較し、グループのサイズと声かけの行動の関係を解明する。

2. 研究の方法

上述の目的を達成するために、石川県白山市において実施している白山市アドベンチャーキャンプ事業のうち2012年と2013年に実施された事例の分析を行った。この事業では、参加者同士の関わりから感じたことや自然の中で発見したことなどを参加者一人一人が毎日記録している。共に活動する参加者への声かけについて記録していることに加え、2012年と2013年の事業では、最初の顔合わせの会の時点で、キャンプに対する期待を把握できる機会があることから、両年の事業の事例をもとに検証した。

(1) 白山市アドベンチャーキャンプの概要

この事業は、「白山を中心とした国立公園の大自然を舞台とした異年齢集団による共同生活を通して、忍耐力や自立心、協調性など豊かな人間性を育むとともに自然環境を深く学ぶこと」^{5) 6)}をねらいとして展開している。白山市が市内の小学5年生から中学2年生を対象に参加者を募り、2004年から毎年実施している。本キャンプの7日間のプログラム構成は毎年同じものとしている。この事業の特徴として、以下の点が挙げられる。

①事業の期間が約1か月あること

本事業は、夏休み中に6泊7日の日程で展開する「本キャンプ」が中心となる。この本キャンプの前に、参加者同士や参加者と指導者が初めて顔を合わせる事前学習会、班編成により野外活動の技術習得をする1泊2日のプレキャンプを実施し、また、本キャンプ終了後もふりかえりを目的として事後学習会を設定している（表1）。

活動	期間	主な内容
事前学習会	日帰り	顔あわせ
プレキャンプ	1泊2日	グループ活動、調理法や用具使用法の体験
本キャンプ	6泊7日	異年齢集団による共同生活を通して、豊かな人間性を育むとともに自然環境を深く学ぶ。
事後学習会	日帰り	思い出会

1日目	グループ活動
2日目	沢のぼり
3日目	全体活動、料理大会
4日目	登山準備
5日目	白山登山
6日目	白山登山
7日目	ふりかえり

表1 白山市アドベンチャーキャンプ事業の流れ

本キャンプの前に行う事前学習会とプレキャンプは、それぞれ1週間から2週間の間隔で開催し、本キャンプから1週間後には事後学習会を開催している。事前学習会から事後学習会まで、参加者が共に活動する期間は、約1か月になっている。本キャンプは、2012年は8月5日から11日の日程で、2013年は8月18日から24日の日程で行われた。

②異年齢の小グループで班を構成していること

参加する子どもたちは、一人一人が役割を持つことができるように1班5名前後の小グループに分かれて活動を行う。班は、この事業の参加実績、年齢、性別等をもとに偏りが出ないように留意して構成している。この班でプレキャンプや本キャンプ中の活動を共にしている。2012年は、参加者12名が1班6名の2グループで構成された。2013年は、参加者13名が1班4～5名の3グループでそれぞれ構成された。

班の運営は子どもたちによる話し合いと協力体制で進め、子どもたちの主体的な活動を促進した。登山等のプログラムや毎食の炊事においても、参加者同士が互いに声をかけあう機会を多く持つことができるようにしている。班には特定の指導者を配置せず、見守る姿勢で班全体や参加者一人一人の活動が円滑に進むように支援を行った。

③参加者の思いを記す機会を多く設定していること

キャンプ中は、1日のふりかえりとして、毎日、1日の活動が終了する際に参加者一人一人が「ふりかえりカード」を記入している。このカードは、その日にあった出来事を思い起こし、自分のこと、自然のこと、友だちのことで発見したことを活字にするためのものである。また、自分から声をかけた友だちについても毎日記入する内容としている。プレキャンプの2日間、本キャンプの7日間の毎日記入した。

(2) 分析対象

白山市アドベンチャーキャンプ2012に参加した小中学生12名（男子8名、女子4名；中学1年生1名、小学6年生7名、小学5年生4名）（表2-1）と白山市アドベンチャーキャンプ2013に参加した小中学生13名（男子7名、女子6名；中学2年生1名、中学1年生5名、小学6年生3名、小学5年生4名）（表2-2）を分析対象とした。

属性	計	男子	女子
中2	0	0	0
中1	1	1	0
小6	7	4	3
小5	4	3	1
計	12	8	4

表 2-1 被験者の内訳(2012)

属性	計	男子	女子
中2	1	1	0
中1	5	3	2
小6	3	2	1
小5	4	1	3
計	13	7	6

表 2-2 被験者の内訳(2013)

(3) 分析方法

事前学習会で主催者が事業の概要を参加者に説明した後、参加者一人一人がこのキャンプに期待することを、質問紙を用いて把握した。

また、プレキャンプと本キャンプ中の毎日の活動終了時に参加者各々が記入する「ふりかえりカード」の「今日自分から声をかけた人」の状況をもとに、「声をかける」「声をかけられる」数の日々の変化を検証した。ふりかえりカードの記入は、毎回全員が同じ場所で行った。「声かけ」は、相手へのはげましなど具体的に声をかけることとし、その旨を記入時に説明している。

今回、参加者のキャンプに対する期待を詳細に捉えるために、Smussenの野外教育の効果の3分類を用いた質問紙調査を事前に行い、参加者群を分けた。この3分類は表3のとおりそれぞれ2つずつの観点を用いて、「環境に対する行動と理解（以下、「自然」とする）」、「社会的人間関係の拡大（以下、「友だち」とする）」、「自己成長（以下、「自分」とする）」

の各カテゴリーとし、参加者がこのキャンプ中に期待するものの違いを捉えた。参加者には、このキャンプで期待することについて各観点で順位をつけさせ、最も期待しているものを6点とし、以下、順序に合わせて1点ずつ減点した得点を与えた。この得点と声かけの状況の関係を見る。なお、各観点は、このキャンプでの期待を捉えるための設定であり、カテゴリーの1つである「友だち」は、キャンプ内の人間関係を指すものとする。

カテゴリー	観点
環境に対する行動と理解 (自然)	自然のすばらしさを体感する
	自然の中で生活することに自信をつける
社会的人間関係の拡大 (友だち)	参加者みんなと友だちになる
	何でも話せる友だちをつくる
自己成長 (自分)	新たに自分の長所や短所に気づく
	できることがさらに上手になる

表 3 カテゴリー別の観点

3. 分析結果

① 参加者がこのキャンプに期待するもの

参加者ごとに、各カテゴリー内の平均をとると、表 4-1、表 4-2 のようになる。観点は1～6 点のいずれかをとるため、中間値の 3.5 点を基準とし、それより高い数値を高得点域、3.50 より低い数値を低得点域として捉えた。

参加者	自然	友だち	自分
A	2.5	2.5	5.5
B	2.5	4.0	4.0
C	2.0	3.0	5.5
D	2.0	3.0	5.5
E	4.0	5.0	1.5
F	3.0	4.0	3.5
G	4.0	4.5	2.0
H	5.5	2.5	2.5
I	5.0	4.0	1.5
J	5.0	3.5	2.0
K	5.5	1.5	3.5
L	4.5	1.5	4.5

表 4-1 このキャンプに期待している順
(2012)

参加者	自然	友だち	自分
A	2.5	4.0	4.0
B	4.5	3.0	3.0
C	5.5	2.5	2.5
D	5.0	3.5	2.0
E	4.5	4.5	1.5
F	2.5	2.5	5.5
G	1.5	4.5	4.5
H	5.5	2.5	2.5
I	4.0	4.5	2.0
J	4.0	2.0	4.5
K	3.0	3.0	4.5
L	1.5	4.5	4.5
M	4.0	3.0	3.5

表 4-2 このキャンプに期待している順
(2013)

(2) 自分から声をかけた人数・自分に声をかけてくれた人数

キャンプ中の毎日の活動の終了時に1日のふりかえりを行う際に記入した「その日に自分から声をかけた人数」について、その推移を見る。

①2012 年の場合

参加者が自分から声をかけた人数の推移を示したものが、表 5-1 である。なお、参加者 J はプレキャンプには不参加であったため、プレキャンプ2 日間の数値はない。

プレキャンプ1 日目からほぼ全員に声をかけ、本キャンプ7 日目まで声をかけている参

加者がいる。一方、プレキャンプが始まってから、自分からは声をかけることができなかったが本キャンプ2日目自分から声をかける人数が全体の半数を超える参加者もいる。その参加者も徐々に声をかける人数が増えてきている様子がうかがえる。

また、声をかけられた側からその人数を捉え、自分が声をかけてもらった人数の推移を示したものが、表5-2である。

プレキャンプを行っている間に声をかけてくれた人数が全体の半数に満たない参加者もいるが、声をかけてくれる人数は徐々に増えている。本キャンプ3日目には全員から声をかけてくれる参加者もあり、全体で声をかけあっている様子がうかがえる。

参加者	プレ1日目	プレ2日目	本1日目	本2日目	本3日目	本4日目	本5日目	本6日目	本7日目
A	10	10	11	11	11	11	11	11	11
B	8	10	11	11	11	11	11	11	11
C	5	5	11	11	11	11	11	11	11
D	6	7	11	11	11	11	11	11	11
E	3	3	4	8	11	11	8	11	11
F	5	3	7	9	11	11	11	11	11
G	7	5	5	11	11	11	11	11	11
H	9	10	11	11	11	11	11	11	11
I	4	5	9	11	11	11	11	11	11
J	-	-	8	6	11	10	11	11	11
K	2	2	2	2	4	5	7	9	10
L	3	6	8	11	11	11	11	11	11

表 5-1 自分から声をかけた人数(2012)

参加者	プレ1日目	プレ2日目	本1日目	本2日目	本3日目	本4日目	本5日目	本6日目	本7日目
A	6	6	6	10	10	10	9	11	10
B	6	6	8	9	10	10	10	10	11
C	6	5	8	9	10	10	10	11	11
D	6	6	8	9	10	9	10	10	11
E	7	6	8	10	11	11	11	11	11
F	6	6	6	9	10	10	11	11	11
G	7	8	10	10	11	11	11	11	11
H	5	6	10	10	11	11	10	11	11
I	5	6	8	9	10	11	11	11	11
J	-	-	8	10	11	11	10	11	11
K	3	5	10	9	11	11	11	11	11
L	5	6	8	9	10	10	11	11	11

表 5-2 自分が声をかけてもらった人数(2012)

②2013 年の場合

参加者が自分から声をかけた人数の推移を示したものが、表6-1である。なお、参加者Dは本キャンプ3日目から怪我のため離脱しており、3日目以降、12人の参加者でキャンプを行っている。

プレキャンプ時には、自分から声かけできた人数が最も多い参加者で全体の半数の6人であり、自分から声をかけることができない参加者もいる。本キャンプが始まってからは、ほぼ全員に声をかけ続けている参加者がいる一方、徐々に声をかける人数を増やす参加者もいるなど2012年と同様の傾向が見られる。

また、自分が声をかけてもらった人数の推移を示したものが、表6-2である。

プレキャンプ中は、どの参加者も声をかけてもらった人数は、全体の半数以下であるが、日数が経つごとに声をかけてくれる人数は徐々に増えている。本キャンプ4日目には、声をかけてくれる人数は全員が全体の半数を超えており、日ごとに全体で声をかけあっている様子がうかがえる。

参加者	プレ1日目	プレ2日目	本1日目	本2日目	本3日目	本4日目	本5日目	本6日目	本7日目
A	6	7	8	12	12	11	11	11	11
B	0	0	6	8	8	8	7	9	11
C	5	4	9	11	12	11	11	11	11
D	2	4	9	11	-	-	-	-	-
E	0	0	2	0	4	5	8	8	10
F	3	1	3	6	5	5	6	8	10
G	6	4	10	12	11	11	11	11	11
H	6	8	7	10	12	11	11	11	11
I	1	1	3	2	3	3	4	8	9
J	0	0	2	3	3	5	7	8	10
K	4	3	6	7	7	8	8	8	10
L	5	5	8	9	9	9	9	8	11
M	5	5	8	11	7	11	11	11	11

表 6-1 自分から声をかけた人数(2013)

参加者	プレ1日目	プレ2日目	本1日目	本2日目	本3日目	本4日目	本5日目	本6日目	本7日目
A	6	6	7	7	6	9	10	11	11
B	0	0	7	8	7	8	8	9	10
C	4	4	8	8	9	8	8	10	11
D	3	6	4	9	7	-	-	-	-
E	1	0	7	8	7	8	8	7	10
F	5	5	9	9	7	8	9	9	9
G	4	3	4	6	7	8	8	10	11
H	5	3	6	7	7	8	10	10	11
I	4	3	4	5	7	7	7	7	10
J	0	0	5	10	7	9	9	10	11
K	6	5	8	10	8	9	10	10	10
L	3	4	7	9	8	8	9	9	11
M	2	3	5	6	6	8	8	10	11

表 6-2 自分が声をかけてもらった人数(2013)

(3) パターン別の参加者の行動

「友だち」カテゴリーの得点が高い参加者を見ると、声かけの行動に複数の傾向が見られたので、他のカテゴリーも併せて分析することとした。その結果、「自分」を分析に加えることで一定の傾向が見えることがわかったので、本稿ではその結果を報告する。

(1)の表 4-1「このキャンプに期待している順」のうち、「友だち」カテゴリーの得点が高い参加者を「仲間づくりを期待する参加者」として捉えた。これに該当する参加者を「自分」カテゴリーの得点も高い参加者（「友だち」「自分」共に期待値が高い参加者）と、「自分」カテゴリーの得点が低い参加者（「友だち」の期待値が高いが「自分」の期待値が低い参加者）に分類した。

①2012 年の場合

「友だち」「自分」共に期待値が高い参加者は、B の 1 名、「友だち」の期待値が高いが「自分」の期待値が低い参加者は、E、G、I の 3 名である。「友だち」「自分」共に高い値を示した参加者 B の声かけの人数の推移は、図 1-1 のとおりである。

参加者 B は、プレキャンプ 1 日目に 8 人、同 2 日目には 10 人の参加者に声をかけており、本キャンプ中は毎日全員に声をかけている。声をかけてもらった数は、

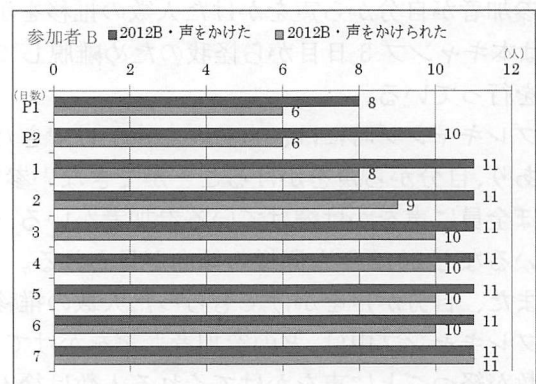


図 1-1 自分から声をかけた人数と
自分に声をかけてくれた人数
（「友だち」「自分」共に期待値が高い参加者）

プレキャンプ中が2日間共に6人、本キャンプ1日目は8人で以降徐々に増え、本キャンプ7日目に全員に声をかけてもらっている。全員から声をかけてもらうまで、常に声をかける人数が声をかけられる数を上回っている。

一方、「友だち」の数値は高く「自分」の数値が低い参加者E、G、Iの声かけの推移は、図1-2のとおりである。3人共に最終日には全員に声をかけ、また、声をかけてもらっているが、プレキャンプ期間などキャンプ開始からの数日は、声をかけてもらう人数が声をかける人数を上回っている。

参加者Eは、プレキャンプでは2日間とも、自分から声をかけた人数は3人であり、本キャンプ3日目に全員に声をかけることができるようになるまで、声をかけてもらう人数の方が多い。参加者Gは、プレキャンプ1日目は声をかける人数、声をかけてもらう人数共に7人で同数であるが、プレキャンプ2日目、本キャンプ1日目は声をかけてくれた人数が自分から声をかける人数を大きく上回っている。参加者Iは、本キャンプ1日目に自分から声をかける人数が声をかけてもらう人数を上回り、2日目以降全員に声をかけているが、プレキャンプ中は声をかけられる人数の方が上回っている。

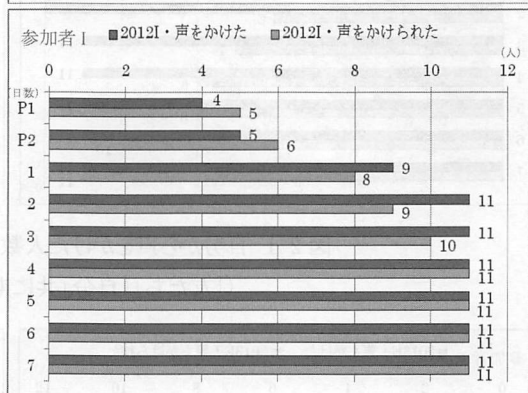
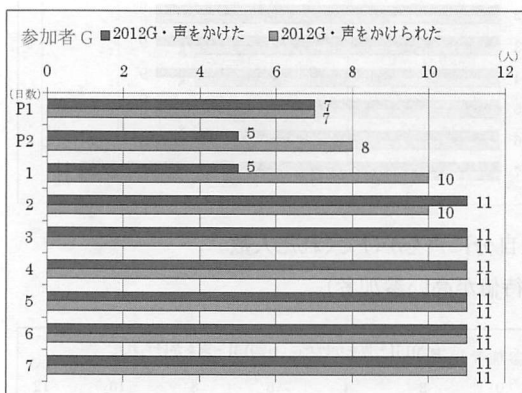
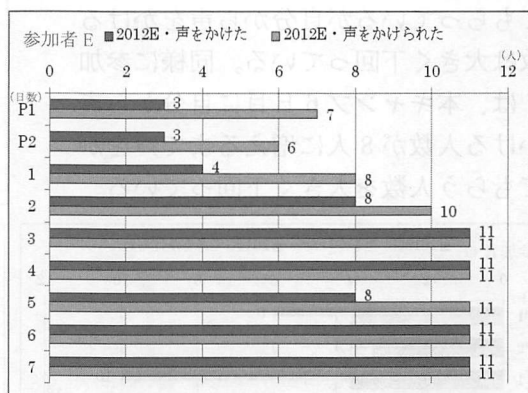


図 1-2 自分から声をかけた人数と自分に声をかけてくれた人数
(「友だち」の期待値が高く「自分」の期待値が低い参加者)

②2013 年の場合

「友だち」「自分」共に期待値が高い参加者は、A、G、Lの3名、「友だち」の期待値が高いが「自分」の期待値が低い参加者は、E、Iの2名である。

「友だち」「自分」共に高い値を示した参加者A、G、Lは、プレキャンプ1日目から本キャンプ7日目にかけて、自分から声をかける人数が声をかけられる人数を下回ることにはなかった(図2-1)。

参加者Aは、プレキャンプ1日目は声をかける人数、声をかけられる人数共に6人であるが、以降、自分から声をかける人数は増え、本キャンプ2日目からは全員に声をかけて

いる。参加者Gは、声をかける人数はプレキャンプ1日目が6人、2日目が4人であり多くはないが、本キャンプ中はほぼ全員に声をかけており、声をかけられる数を大きく上回っている。参加者Lは、全員に声をかけることができたのは本キャンプ7日目であるが、声をかけられる人数を下回ることにはなかった。

「友だち」の数値は高いが「自分」の数値が低い参加者E、Iは、キャンプ中、自分から声をかける人数は声をかけられる人数を下回っている日が多くあった（図2-2）。

参加者Eは、プレキャンプ中は自分から声をかけることはできず、本キャンプが始まってから4日目にかけて、声をかけてもらっているが自分から声をかける人数は大きく下回っている。同様に参加者Iは、本キャンプ6日目に自分から声をかける人数が8人に増えるまで声をかけてもらう人数を大きく下回っている。

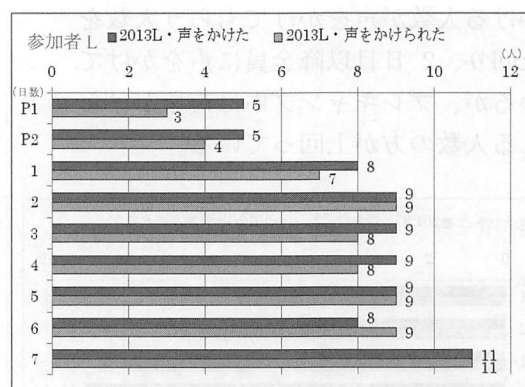
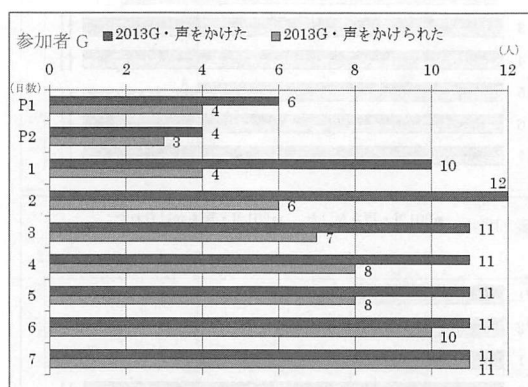
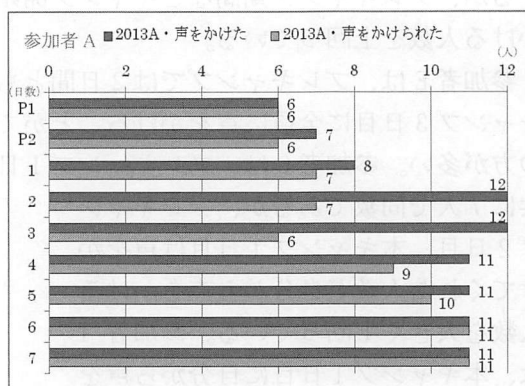


図 2-1 自分から声をかけた人数と自分に声をかけてくれた人数
 (「友だち」「自分」共に期待値が高い参加者)

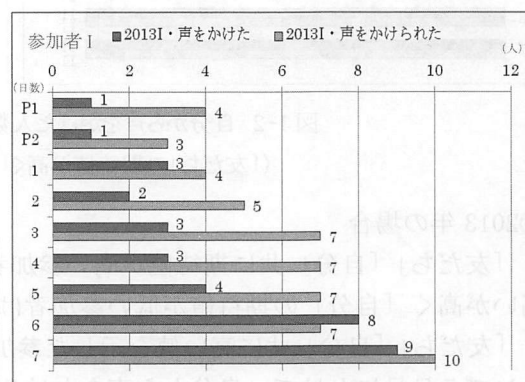
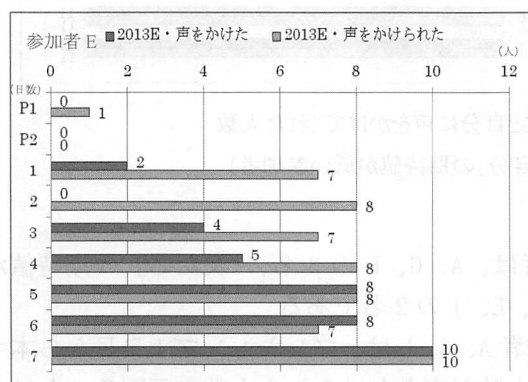


図 2-2 自分から声をかけた人数と自分に声をかけてくれた人数
 (「友だち」の期待値が高く「自分」の期待値が低い参加者)

(4) 班別の声かけの比率

本研究では、参加者個人が持つ期待と声かけ行動の関係に加え、さらに班編成による観点から、班を構成する人数と声かけの関係を検討した。

個人の期待値以外に声かけの行動に影響を与えるものとして、グループ構成が要因のひとつとして考えられる。本事業では、参加実績や年齢、性別に偏りが出ないように班編成を行っている。2012年と2013年の事業において、班編成の大きな違いとして1つの班あたりの人数が挙げられる。そこで、班ごとの声かけの特徴を明らかにするために、同じ班に所属する参加者への声かけと他班の参加者への声かけの状況をその比率から見る。

①2012年の場合

6人で1つの班を構成する2つの班で活動を行った。

2つの班ともにプレキャンプ1日目から班内では7割以上の声かけが行われている(図3)。その一方で他班の参加者に対しては、プレキャンプ中は5割に満たない。班内の声かけは、プレキャンプ2日目から2つの班ともに8割に達し、本キャンプ3日目には9割を超えている。他班への声かけは、各班ともに本キャンプ2日目に7割を超え、以降最終日まで高い比率を継続している。

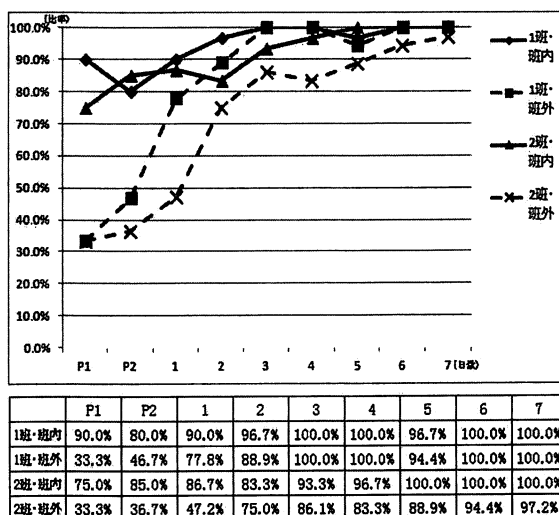


図3 班別の声かけの比率(2012)

②2013年の場合

4~5人で1つの班を構成する3つの班で活動を行った。

1つの班はプレキャンプ1日目に班内の声かけが7割を超えたが、それ以外の2つの班は班内の声かけは4割に満たない(図4)。他班への声かけは1つの班がプレキャンプ1日目に5割を超えたが、本キャンプ2日目に全ての班が5割を超えるまでは低い比率である。

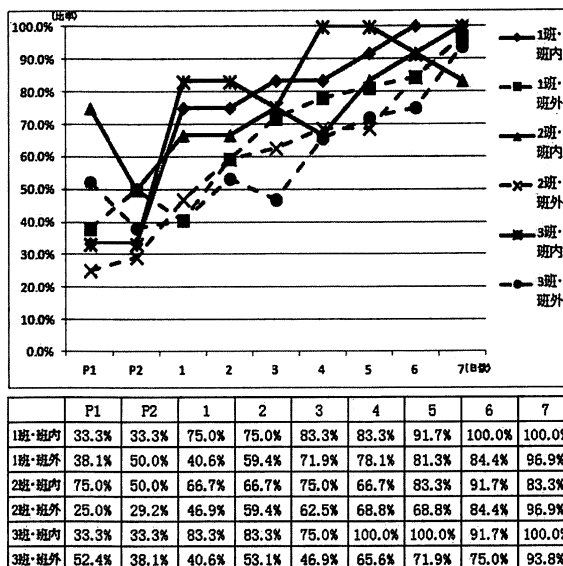


図4 班別の声かけの比率(2013)

4. 考察

本研究は、参加者がキャンプに期待するもののうち、仲間づくりを特に期待する参加者とそれが表れていない参加者に分類し、周囲の参加者への関わりを日々の声かけの様子か

ら分析した。仲間づくりを期待する参加者からの継続的な声かけが仲間意識を全体に広げている⁷⁾と考えられた。しかし、参加者が期待する野外教育の側面を「自然」「友だち」「自分」として分類し、参加者が持つ思いをより詳細に捉えると、「友だち」への期待が大きい参加者であっても「自分」に関しての期待の強弱で行動に違いがあると考えられる。

つまり、「友だち」への期待値が高く、「自分」に関する期待値も高い参加者は、キャンプ当初から周囲に積極的に声かけできることがうかがえる。一方、「友だち」への期待値が高い参加者であっても「自分」に関する期待値が低い参加者は、キャンプ前半は、自分から周囲への声かけは鈍く、周囲から声をかけられる数を下回っている。参加当初に仲間づくりへの思いを持っていたとしても自分自身への期待が伴わない場合、あるいは、自分への期待よりも「自然」により関心が向けられている場合には、当初からの積極的な周囲への声かけは進まないことが考えられる。

また、参加者個人の思いとは別に、班編成による観点から、班を構成する人数と声かけの関係を検討した。班の人数が少ないと声をかけ合う機会が増えると考えられるが、6人で1班の2012年の場合と4～5人で1班の2013年の場合を比較したところ、構成人数が少ない方が声をかけ合う比率は低い傾向にあった。構成人数と声かけの関係は、より多くの事例から分析が必要であるが、共に活動する人数が少ないと班としての行動につながることが考えられる。

グループ運営を行っていくには、参加者同士の人間関係を形成するために「友だち」や「自分」への期待を持っている参加者を各班に配置すること、さらに、グループを構成する人数にも配慮が必要となることが、運営の要素になると考えられる。

今回、一事業の参加者を対象として研究を進めた。2ヶ年分の事例から比較検証したが、参加者が少ない事業であることから、より多くの事例も合わせて今後さらに検討していく必要がある。声をかけやすい状況をつくるものとして、その仕組みをさらに多面的に捉え、より正確な結果を得ていきたいと考える。

注記・引用文献

- 1) 星野敏男「組織キャンプと小集団」(星野敏男・金子和正監修『野外教育の理論と実践』杏林書院、2011) pp. 39-40
- 2) 東雅宏「組織キャンプにおける仲間づくりの特徴－参加者の所期の思いとキャンプ中の声かけの相関の視点から－」(『日本生涯教育学会論集』33、pp83-92、2012) p91
- 3) Van der Smitten, B 'The dynamics of research' "Research in Camping and Environmental Education (Penn State HPER Series, No. 11)" Pennsylvania State University, 1975, pp5-17
- 4) 小森伸一「野外教育理論の再考Ⅰ－『三大学習観点』の提言から」(『東京学芸大学紀要』芸術・スポーツ科学系 62 巻、pp39-46、2010) p43
- 5) 『白山市アドベンチャーキャンプ 2012 実施報告書』白山市アドベンチャーキャンプ実行委員会、2012、p2
- 6) 『白山市アドベンチャーキャンプ 2013 実施報告書』白山市アドベンチャーキャンプ実行委員会、2013、p2
- 7) 東雅宏、前掲書、p91